

# 渡日直後の日本語研修生の 学習・生活環境調査

今 西 利 之

## 要 旨

渡日直後の留学生は生活及び学習上のさまざまな問題点に直面するが、それらの多くは知識・情報の欠如によるものが多いと思われる。また、渡日前にある程度の知識・情報を持っている場合でも、それらの知識・情報が日本語の運用能力と関連付けられていないことが原因となって、十分に生かされていない場合もあるだろう。いずれの場合でも、問題を解決するという学習者自身の能動的な営みを通じて日本語の学習を行うことができるような学習環境や素材を提供することができれば、学習者のニーズに沿ったより実践的で実用的な日本語の学習が可能になるとと思われる。本稿は、このような学習環境を構築するための基礎的な資料を得るために行った渡日直後の日本語研修生に対するアンケート調査の結果をまとめたものである。

## 1. はじめに

熊本大学留学生センター日本語研修コースでは熊本大学及び近隣の国立大学へ入学する留学生を研修生として受け入れている<sup>(1)</sup>。研修生は4月及び10月初旬に渡日し、その後このコースで約6ヶ月間日本語の学習を行うことになっているが、事務手続きや各種オリエンテーション、コース運営上の都合などもあり、渡日日から1週間程度の期間をおいた後、コース開始日を迎えることとなる<sup>(2)</sup>。しかしこの期間に関して研修生から「何もすることがない。」といった声を耳にすることもあるし、そのことが原因で精神的に不安定になる研修生がいても不思議ではない。また日本語学習の側面から見ればこの期間は「空白の期間」といってもいいかもしれない。この「空白の期間」は、その後の日本での留学生活の基盤となる生活環境を整える期間であると同時に、コースにおける6ヶ月にわたる日本語学習の基盤を築く期間でもある。この期間にコース開始後の学習活動の基盤となるような知識・情報<sup>(3)</sup>を研修生自らが能動的に獲得できるような学習環境を作り上げることができれば、「空白の期間」を埋めることにもなるであろうし、学習者のニーズに沿ったより実践的で実用的な日本語の学習が可能となるだろう。本稿はこのような学

習環境を構築するため基礎的な資料を得るために行ったアンケート調査をまとめたものである。

## 2. 調査の目的・対象・方法

調査は、渡日直後の研修生が日本語や渡日後の生活環境についてどの程度の知識・情報を渡日前に持っていたのか、また渡日直後の日本語の学習や生活環境がどのようなものであるのかを把握し、よりよい学習環境を構築するための基礎的な資料とすることを目的として、平成12年度後期(10月から3月)に熊本大学留学生センター日本語研修コースに在籍した大使館推薦国費留学生と教員研修生計7名を対象に、渡日後約3週間が経過した10月下旬にアンケート形式(英文)で行った<sup>(4)</sup>。回答者の国籍・性別・身分・日本語学習歴は次の表1の通りである。

表 1

国 籍	性別	身 分	日本語学習歴
チュニジア	男	大使館推薦国費留学生	7ヶ月
ペラルーシ	女	大使館推薦国費留学生	未 習
ミャンマー	女	教員研修生	2ヶ月
ミャンマー	女	教員研修生	2ヶ月
マレーシア	女	教員研修生	未 習
フィリピン	男	教員研修生	2週間
韓 国	女	教員研修生	15ヶ月

回答方法には選択形式と自由記述形式がある。自由記述形式への回答は基本的には英語で行われているが、日本語での回答が行われた項目も一部あった。以下、アンケートの質問項目を列挙し、回答内容の提示及びその分析等は次節で行う。

### ●熊本に来る前に

#### ◆どのような知識や情報を持っていたか

- ①日本語について
- ②日本の印象やイメージ
- ③日本で生活について

④熊本や熊本大学について

⑤これらの知識・情報をどのようにして手に入れたか

●熊本に来てから

◆日本語の学習について

①文字（ひらがな・カタカナ・漢字）についての印象

②文字（ひらがな・カタカナ・漢字）の学習方法

③放課後毎日どのくらい勉強しているか

④学習活動の内容と割合

⑤日本語学習の目的

◆生活について

①よく使う交通手段は何か

②食料や日用品をよく購入する店はどこか

③食事をどこでしているか

④一人で行くことができる場所はどこか

⑤日本人の友達がいるか／どのようにして日本人の友達を見つけたか

⑥渡日後1週間に宿舎についてわからないことがあったか

⑦渡日後3週間でどのような日本語の表現が必要だと思ったか

⑧日本に来る前にどのような情報が欲しかったか

### 3. 調査結果

この節では、前節で挙げた項目別に回答内容を提示し、その分析を行う。

#### 3-1 熊本に来る前に

最初に、研修生が日本語や日本(熊本)での生活について渡日前にどのような知識や情報を持っていたのかを調査した。これらの知識や情報は渡日直後から見知らぬ土地で日本語の学習のみならず社会生活を送らなければならない研修生にとってはその拠り所となるものである。

##### 3-1-1 日本語について

この質問は、渡日前の日本語学習の経験を把握するためのものである(選択形式)<sup>(5)</sup>。各項目に対する回答数は表2のとおりである。

表 2

	ひらがな	カタカナ	漢 字	文 法	会 話
Yes	4	4	2	4	3
No	3	3	5	3	4

全員の回答が一致した項目は一つもなかった。また各回答者の回答内容も、全項目について学習経験がある（１名）、会話のみ学習経験がない（１名）、ひらがな・カタカナ・文法の学習経験がある（１名）、ひらがな・カタカナのみ学習経験がある（１名）、文法・会話のみ学習経験がある（１名）、会話のみ学習経験がある（１名）<sup>6)</sup>、全項目について学習経験がない（１名）、といった具合でまったく一致していない。

### 3-1-2 日本の印象やイメージ

この質問は、研修生が渡日前に持っている日本の印象やイメージを把握するためのものである（自由記述形式）。回答内容を要約すると以下のとおりである。

- ・地位の向上に役に立つ。
- ・研究に最適の場所である。
- ・非常に発展した国である。
- ・高度な技術がある。
- ・歴史的に興味深い。
- ・物価が一番高い国である。
- ・詩人や画家などが有名である。
- ・日本人は親切である。
- ・よく働く。
- ・若者はファッションに敏感である。

日本を留学先として選んでいるだけに肯定的な印象やイメージが大半である。と同時にこれらの印象やイメージはいわゆる典型的な日本像・日本人像でもある。

### 3-1-3 日本での生活について

この質問は、長期にわたる日本での生活について、研修生が渡日前にどの程度の知識を持っているのかを把握するためのものである（自由記述形式）。内容を要約するよ以下のとおりである。

- ・食べ物：すし・さしみ・すきやき

- ・伝 統：きもの  
「すみません」「ありがとう」などをためらわずに言ったほうが  
いい
- ・買い物：バラエティに富んだショッピングができる
- ・交 通：交通機関は発達している(新幹線)が高い  
車は左側通行である

これらの回答内容は 3-1-2 と同様に典型的な日本での生活像である。アンケート実施後に具体的な生活環境（例えば宿舎での生活・学習・研究を中心としたライフスタイル・食生活等）についての知識や情報を持っていたかどうかを口頭で尋ねたところ、全員が持っていなかったと回答した。

### 3-1-4 熊本や熊本大学について

この質問（自由記述形式）に対しては、熊本の地理的な位置・気候を全員が知っていたと答えている。また熊本の伝統・歴史についても 2 人の研修生が知識・情報を手にいれることができたと答えている。しかし、例えば学年暦、授業スケジュール、専門の研究に関する情報など、より具体的な内容についての知識・情報は持っていなかったようである。

### 3-1-5 これらの知識・情報をどのようにして手に入れたか

この質問は、知識・情報の入手方法を尋ねたものである（選択形式／複数回答可）。次の表 3 に結果を示す。

表 3

本などの印刷物から	4
テレビやラジオの番組から	3
家族や友達から	1
大学や学校の先生や職員から	2
日本大使館から	4
インターネット（Web ページ）から	4
その他 （以前に国費留学生として渡日経験がある人から）	2

この回答からは、個人的な人間関係を通じて知識・情報を得ているケースが少ないこと、インターネット（Web ページ）が既存の情報媒体と同程度用いられていることがわかる。

### 3-2 熊本に来てから

次に、渡日直後の研修生の学習・生活環境の実態、及び研修生が抱えている問題を把握するための調査を行った。

#### 3-2-1 日本語の学習について

アンケート調査を行った段階で、研修生はひらがな・カタカナクラス 6 コマ（1コマ90分）、それに続く文法、会話、読解・作文、コンピュータの授業を計22コマ受講している<sup>7)</sup>。日本語学習歴の長い学生（1名）を除いては、簡単な挨拶や定型の自己紹介ができるといった程度の日本語のレベルである。また漢字は約15文字程度を学習した段階である。

##### 3-2-1-1 文字（ひらがな・カタカナ・漢字）についての印象は

ひらがな・カタカナ・漢字の読み書きについての印象を尋ねたところ（選択形式）、次の表 4 のような回答が得られた。

表 4

		とても簡単	簡単	難しい	とても難しい
ひらがな	読み	2	5	0	0
	書き	2	5	0	0
カタカナ	読み	0	4	3	0
	書き	0	5	2	0
漢 字	読み	0	0	6	1
	書き	0	0	5	2

学習経験の有無にかかわらず、ひらがなについては全員が易しい、漢字については全員が難しいという印象を持っている。カタカナについては印象が分かれているが、カタカナの学習経験のある者が「難しい」と答えている場合や、学習経験のない者が「簡単」と答えている場合もある。このことは文字の学習に関しては渡日前の学習経験の有無と回答との間に相関関係がないこ

とを意味している。

### 3-2-1-2 文字（ひらがな・カタカナ・漢字）の学習方法は

文字の習得は、教室活動における教師の指導だけでは不十分であり、研修生自身の努力に負うところが大きいと思われる。そこで研修生が実際にどのような学習方法で文字の習得に取り組んでいるのかを尋ねてみた（自由記述形式）。多くの研修生が「何度も書いて覚える。」「繰り返し練習するしかない。」という回答を寄せている一方で、「友達と一緒に勉強する。」「ラベルに文字（単語）を書いて実物に貼り付ける。」という回答があった。

### 3-2-1-3 放課後毎日どのくらい勉強しているか

放課後の日本語の学習時間は平均2.7時間（小数第2位四捨五入）であった。内訳は2時間半1名、2時間3名、3時間2名、4～5時間1名である。（自由記述形式）

### 3-2-1-4 学習活動の内容と割合

研修生は教科書の他に副教材として教科書に準拠した文法説明書とカセットテープを自習用として持っている。この質問はこれら教科書類の使用状況をつかむとともに、渡日直後の研修生の学習スタイルがどのようなものであるかを把握することを目的としたもので、項目別の学習活動の割合を、合計が100%になるように回答させた。表5は項目別の平均値である。

表5

教科書の説明(英文)を読む	24.0%
文や単語を声を出して読む	27.9%
カセットテープを聞く	19.3%
文字や文を書く	22.4%
その他	5.0%

（小数第2位以下四捨五入）

その他への回答として挙げられていたのは以下のものである。

- ・テレビを見て、耳にとまった語彙の意味を辞書で調べる

- ・新出の単語や表現を含むマンガを書き、同じ単語や表現が使える状況をイメージする

これらの回答からは、四技能のうち「読む」「書く」に力点を置いた学習が行われていることがわかる。

### 3-2-1-5 日本語学習の目的は

研修生の渡日目的はいうまでもなく各自の専門領域の研究にあるが、原則として渡日直後の6ヶ月間は専門領域の研究ではなく日本語の学習を行うことになっている。この質問は渡日直後の研修生が日本語の学習目的をどのようにとらえているのかを知ることを目的としたものである（自由記述形式）。回答内容は以下のとおりであり、6ヵ月後に始まる専門領域の研究を強く意識したものが多かった。

- ・専門分野の研究の準備
- ・日本で生活や研究をするため
- ・日本語で書かれた本を読むため
- ・日本の文化や教育システムを知るため
- ・日本語で論文（レポート）を書くため
- ・指導教官や友達とのコミュニケーションをはかるため

### 3-2-2 生活について

研修生は渡日直後から新しい環境の中で日常生活を営まなければならない。3-1での回答内容が示すとおり、研修生は日常生活についての具体的な知識・情報を十分に持たないまま渡日しているし、コース開始に先立つオリエンテーションなどを通じて与えられる知識・情報も必ずしも日々の生活と具体的な関連があるとは限らない。また、知識・情報が与えられていたとしてもそれが日本語の運用と結びつかなければ役に立たないこともあるであろう。そこで日本語の学習との結びつきを視野に入れつつ、渡日直後の研修生の生活環境を調査してみた。

#### 3-2-2-1 よく使う交通手段は何か

通学や買い物時の交通手段を尋ねてみた（自由記述形式）ところ、「毎日



バスに乗る」と答えた1名以外は、徒歩か自転車を使用しているとの回答であった。ただし、回答が自転車のみであるのは2名だけで、残りの4名はバスの利用(特に市内中心部へ向かうとき)を併記している<sup>8)</sup>。

### 3-2-2-2 食料や日用品をよく購入する店はどこか

食料品や日用品をよく購入する店を尋ねてみた(自由記述形式)ところ、以下のような回答を得た。

- |              |                |
|--------------|----------------|
| ・子飼商店街       | ・100円ショップ(上通り) |
| ・サンリブ        | ・ひろせ           |
| ・ヤマザキデイリーストア | ・ダイエー(下通り)     |

このうち、子飼商店街・サンリブはすべての学生が挙げている。ここは、渡日日翌日のコースオリエンテーションの後で実施した大学周辺案内の際に訪れた場所であり、宿舎とは逆方向になるものの大学から一番近い場所である。また、100円ショップ(上通り)とダイエー(下通り)もオリエンテーションの一環として行った市内ツアーの際に学生に紹介してある。その他は宿舎の周辺にある店である。このことから渡日直後の実体験が大きく影響していること、また研修生が利用する店はある程度限定されていることがわかる。

### 3-2-2-3 食事をどこでしているか

食生活の様子について尋ねてみた(自由記述形式)。朝食・夕食は全員が宿舎で自炊をしていると回答している。また、昼食も学内の食堂を利用していると回答したのは3人で、残りの4人は自分で作った弁当を持参していると回答している。自炊をしている理由として、学生の一人は、化学調味料を用いた食べ物が多いこと、外食では宗教上の理由により食べられないものばかりであることを挙げていた。また、事務的な手続きの都合でこの時期には奨学金をまだ受け取っていないことも回答に影響を与えているかもしれない。

### 3-2-2-4 一人で行くことができる場所はどこか

渡日後約3週間が経過した段階で一人で行くことができる場所、すなわちそこへ一人で行って目的を達成することができる場所を尋ねてみた(選択形式/複数回答可)。項目として挙げた場所はいずれも日常生活の中で必要性

が高いと思われるところばかりである。また、日本語以外の言語（特に英語）を用いることができない場所も当然含まれている。表6は行くことができると回答した人数を項目別にまとめたものである。

表 6

留学生課（事務室）	7	指導相談室	6
研究室（指導教官）	4	宿舍の事務室	6
図書館	5	郵便局	7
生協の食堂	7	銀行	2
くすのき会館 <sup>9)</sup> のレストラン	4	市役所	6
生協の書店	5	学外のレストラン	6
生協の文房具店	6	スーパー、デパート、コンビニ	7
生協のプレイガイド	5	病院	2
保健管理センター	5	バス、タクシー、列車	7

研修生全員が行くことができると答えた場所は利用頻度が高い場所と授業の一環としてロールプレイや実習を行った場所（郵便局）である。一方、行くことができると回答した者が最も少ない「銀行」は学内にある ATM を利用することで目的を達成することができる場所であり、「病院」は利用頻度が少ない場所であるとみていいだろう。「研究室（指導教官）」の数値が低いのは他大学へ移る学生（2名）がいることが要因として考えられる。

### 3-2-2-5 日本人の友達がいるか／どのようにして日本人の友達を見つけたか

日本人の友達がいると答えたのは1人のみであった。渡日直後のオリエンテーション（ボランティアとして熊本大学所属の学生が参加している）がきっかけのようである（自由記述形式）。

### 3-2-2-6 渡日後1週間に宿舍についてわからないことがあったか

渡日後の生活の基盤となる宿舍での生活についてわからないことがあったかどうか尋ねてみた（自由記述形式）。「なし」と答えた学生が4人いたが、残りの3人は以下の点がわからなかったと答えている。

・洗濯機の使い方

・電気コンロの使い方

- ・ 湯沸し器の使い方
- ・ ふとんのレンタル料と支払い時期
- ・ エアコンの使い方
- ・ 1 階のロビーの使い方

これらの項目は渡日時のオリエンテーションで説明が行われているものであるが、実際の使用の際には日本語の表記を頼りにしなければならないものであると推測される。

### 3-2-2-7 渡日後 3 週間でどのような日本語の表現が必要だと思ったか

この質問は、渡日直後の研修生にとって日常生活の中で必要性が高い日本語はどのようなものであるかを調べることを目的としたものである（自由記述形式）。回答内容は以下のとおりである。

- ・ あいさつ（「おはよう」「こんにちは」等）
- ・ 数字
- ・ 感謝の気持ちを述べる（「ありがとう」）
- ・ 場所を尋ねる（「～はどこですか」）
- ・ 自己紹介
- ・ 自分の名前と国籍をカタカナで書く
- ・ 買い物（食べ物の名前）

また、この他に以下の具体的な日本語の表現が挙げられていた。

- ・ すみません
- ・ なんのりょうりですか
- ・ おねがいします
- ・ えいごでおねがいします
- ・ ドルを円にかえたいんですが
- ・ みちにまよいました
- ・ これは～をとりますか／～へいきますか（バスに乗るとき）

これらの日本語の表現は、渡日後約三週間の生活の中で使用する必要があったにもかかわらず使用することができなかった、あるいは現在も使用できずにいるものであり、そのことが原因で日常生活に支障をきたしている可能性

も否定できない。これらの中には文型積み上げ形式の日本語学習では渡日直後には学習しないものも含まれている。しかし、これらの日本語の表現が渡日直後の研修生の日常生活を円滑にするのであれば、文型積み上げ形式における提出順（学習順）、あるいは文法的な知識に基づく表現の応用性を一時棚上げにした状態で、定型の表現として学習させることも必要であろう。

### 3-2-2-8 日本に来る前にどのような情報が欲しかったか

この質問は、日本での生活の経験から、どのような情報を事前に持っていることが渡日後の生活や研究に役に立つと考えているのかを調査するためのものである（自由記述形式）。回答内容は以下のとおりである。

- ・ 気候に関する詳しい情報
- ・ 生活（特に宿舍・住居）に関する情報
- ・ 人口
- ・ 学年歴・授業スケジュール
- ・ 専門に関する具体的な情報（渡日後の研究の準備のため）

これらの情報は、その欠如が渡日直後の生活に支障を与えている可能性があるにもかかわらず、少なくとも今回の研修生には与えられていなかった情報である。ある研修生は、渡日前に Web ページを調べてみたが、英語によるページを見つけることができず、これらの情報を手にいれることができなかったと回答している。

## 4. まとめと課題

今回の調査を通じて、渡日直後の研修生の実態を垣間見ることができた。彼らは渡日後の生活環境や学習・研究活動についての知識・情報を十分に持たないまま渡日しているケースが多い。渡日前に日本語を学習している者もいるが、学習内容は個人によってばらつきがある。また渡日前の知識・情報の収集及び日本語の学習は日本での現実の環境と離れたところで行われたものであるため、渡日後有効に活用されているわけではない。知識・情報の提供が重要であることはいまさら言うまでもない。と同時に、知識・情報の提供が単に提示にとどまるのではなく、その運用を視野に入れたものでなければならぬだろう。

インターネットの発達によって、留学生はインターネットに接続できる環境であれば渡日前に必要な情報・知識を簡単に手に入れることができるようになった。これに対応して、さまざまな機関が Web ページの充実に力を入れている。しかしその多くは英語を中心とした外国語による Web ページの作成に力点がおかれているように感じられる。このこと自体は重要なことであるが、同時に日本語の学習を視野に入れたものであれば、より効果的であろう。しかもそれは日本語の学習のみを目的としたものではなく、渡日前の研修生が渡日後必要になると考えている知識・情報を主体的に収集するという文脈の中に位置付けられていなければならない。また、渡日後においても、渡日前に得た知識・情報との違いを修正する、生活環境を整えるために新たな知識・情報を収集する、すなわちインフォメーションギャップを埋めるといふ文脈の中に日本語の学習を組み込むことができれば、より実践的な日本語を効率よく学習することが可能になるだろう。このような目的を持った学習環境の開発のために今回の調査が役立つものであれば幸いである。

#### 注

- (1)受け入れの対象となる学生は大使館推薦国費留学生及び教員研修生である。なお平成12年度後期からは日韓共同理工系学部留学生の受け入れが始まった。
- (2)平成12年度後期は渡日日が10月3日から5日、授業開始日が10月12日であった。
- (3)ここでの知識や情報とは日本語についての言語的な知識・情報だけではなく、研修生を取り巻く社会的な環境に関する知識・情報をも含めたものである。
- (4)平成12年度後期には日韓共同理工系学部留学生5名が在籍していたが、調査実施時には渡日しておらず、調査対象には含まれていない。
- (5)各項目の学習内容については問うていない。
- (6)この研修生は、会話の学習内容として以下のものを挙げている。

・ こんにちは	・ おくには
・ はじめまして	・ おしごとは
・ おはようございます	・ ふたにくはだめです
・ おなまえは	・ おさけはのみません
- (7)文法の授業では『みんなの日本語』（スリーエーネットワーク）、会話の授業では『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE』（筑波ランゲージグループ）を使用している。なお、日本語学習歴の長い学生（1名）は別の文法の授業を受講している。
- (8)渡日直後のオリエンテーションの一環としてバスの乗車、特に運賃の払い方（整理券と運賃表示板の使い方）を体験させている。

(9)レセプションホールやレストランがある学内の施設である。

#### 参考文献

- 小川多恵子他（1998）「留学初期における学習者像把握のための調査報告ーコース開始時アンケートの結果をもとにしてー」『筑波大学留学生センター 日本語教育論集』第13号（筑波大学留学生センター）
- 久保田賢一（2000）『構成主義パラダイムと学習環境デザイン』（関西大学出版部）
- 高橋純子他（1999）「予備教育期間における学習者像把握のための調査報告」『筑波大学留学生センター 日本語教育論集』第14号（筑波大学留学生センター）

#### 謝 辞

アンケート調査の実施及び本稿の執筆にあたっては梅田泉氏（熊本大学留学生センター）に貴重な助言をいただいた。ここに記して感謝の意を表す。

※本稿は、平成12年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(2)一般 課題番号12680306（研究代表者：梅田泉）の研究成果の一部である。